

有明キャンパスビオトープにおける生物目録作成

研究員 サステナビリティ学科
伊尾木慶子・真名垣聡
アクアスフィア・水教育研究所代表
武蔵野大学客員教授 橋本淳司



生物多様性の損失に歯止めをかけて、プラスに転じるという、「ネイチャーポジティブ（自然再興）」の国際的な流れを背景に、2023年より環境省による「民間の取組等によって生物多様性の域内保全が長期的に図られている区域（OECM）」に対する「自然共生サイト」の認定が開始されました。東京などの大都市では企業などの努力で保全されている緑地も多く、自然関連認証の取り組みもますます加速すると予想されます。そうした緑地の生物多様性の評価は基本的に生物目録を用いることが多く、モニタリングの重要な資料となります。そこで今回の研究では特に有明キャンパス構内で確保されているビオトープにおいて、生物目録を作成することを目的とした調査を行いました。

環境コンサルタントやNPOから昆虫、草本類それぞれの専門家の講師の方々を有明キャンパスビオトープにお招きし、敷地内に生息する種について陸上と水中から外来種の侵入なども含めて調査しました。

昆虫調査では採集やトラップ法などを用

い、トンボやチョウ、カマキリ、テントウムシ類などを含め60種以上の生息が確認されました。特にマルタンヤンマといった都市緑地では希少とされるトンボも生息していることが明らかになりました。草本の調査ではアメリカセンダングサやハルジオンなどの要注意外来生物の他にハンゲショウなどの絶滅危惧種も生息していることが分かりました。また水中の環境DNAについて、メタバーコーディング解析による網羅的解析を実施したところ、数種の巻貝や外来の水生植物が生息していることも明らかになりました。このようにして得られた情報をもとにビオトープの管理計画をたて、質の良い自然環境を長期的に保全していくため、今後も継続的なモニタリングが望まれます。



写真：作成した標本